福岡県　グループホームあがの　　令和5年7月5日

令和　5　年度

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要（事業所記入）】

事業所番号	4079700201		
法人名	医療法人　上野病院		
事業所名	グループホームあがの		
所在地	福岡県田川郡福智町上野2678番地1		
自己評価作成日	令和5年6月13日　南棟	評価結果確定日	令和5年7月5日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度のホームページで閲覧してください。

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/40/index.php

【評価機関概要（評価機関記入）】

評価機関名	特定非営利活動法人ヘルスアンドライツサポートうりずん
所在地	福岡県直方市知古1丁目6番48号
訪問調査日	令和5年6月29日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点（事業所記入）】

薬王寺ののどかな自然の中にある環境が魅力で、入居者様やご家族様からも「良い所ですね」との声を聞くことが多いです。母体が病院だという事も強みになります。病院との距離も近く、何かあればすぐに診てもらえる事でご家族様も安心してされていると思われます。上野病院のデイケアとの連携もでき、数名の方が楽しく参加されています。職員の定着してきており、情報の共有の質が高まり、信頼感の向上にもつながっています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点（評価機関記入）】

理念の本人のできる事、できる可能性がある事を考える支援を日々実践している。退院時は歩けなかった入居者が立位や歩行ができるようになったり、クラスター収束後も食事以外は自室に籠りがちな入居者にはメリハリある暮らしを支援したり、夕方になると家に帰ると車椅子で動き回る入居者は立ち上がりができるようになるなど、タイムリーなケアが展開している。毎月発行の「あがの通信」で、各入居者の笑顔の写真や日々の暮らしぶり、行事などを報告しているが、クラスター発生時も家族の心配を受け止め、通信で対応を説明している。母体医療機関から看護師の派遣や衛生材料の提供を受け、全職員一丸となってクラスターを収束し、終末期ケアや看取りも母体医療機関との連携が、家族の安心となっている。個々の能力を発揮して生き生きと勤務できる体制で人材育成に務め、地域の方が徘徊されていた人をホームに同行されるなどホームへの信頼も篤い。7月には七夕まつりなど地元小学校との交流や運営推進会議が再開予定で、さらなる理念の具現化や地域密着したサービスが期待できる。

V．サービスの成果に関する項目（アウトカム項目）　※項目№1～57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

	項　目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
58	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる（参考項目：25,26,27）		1. ほぼ全ての利用者の
		○	2. 利用者の2/3くらいの
			3. 利用者の1/3くらいの
			4. ほとんど掴んでいない
59	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある（参考項目：20,40）	○	1. 毎日ある
			2. 数日に1回程度ある
			3. たまにある
			4. ほとんどない
60	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている（参考項目：40）		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
61	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている（参考項目：38,39）		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
62	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている（参考項目：51）		1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
		○	3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
63	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている（参考項目：32,33）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
64	利用者は、その時々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている（参考項目：30）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない

	項　目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
65	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている（参考項目：9,10,21）		1. ほぼ全ての家族と
		○	2. 家族の2/3くらいと
			3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんどできていない
66	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている（参考項目：2,22）		1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度
		○	3. たまに
			4. ほとんどない
67	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている（参考項目：4）		1. 大いに増えている
			2. 少しずつ増えている
		○	3. あまり増えていない
			4. 全くいない
68	職員は、活き活きと働けている（参考項目：11,12）	○	1. ほぼ全ての職員が
			2. 職員の2/3くらいが
			3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
69	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
70	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が
			2. 家族等の2/3くらいが
			3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどできていない

自己評価および外部評価結果

ユニット／事業所名　**南棟／グループホームあがの**

自己	外部	項　目	自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	外部評価 次のステップに向けて期待したい内容
Ⅰ.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念を理解し、実践につなげるよう心掛けている。家族としてとの思いを持ち接している	朝の理念を唱和する声で気持ちを乱される入居者もあり、勉強会で理念の共有や実践について振り返っている。理念の本人のできる事、できる可能性がある事を考える支援で、退院時は歩けなかった入居者が立位や歩行ができるようになり嬉しいと、管理者や職員は話している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍においては難しかったが、これから積極的に取り組む思いはある	3月のひな祭りには、地元小学校からの訪問があり、七夕祭りも交流予定など、小学校との交流が再開している。地域の方が、徘徊している人をホームに同行され対応を頼まれるなど、地域の相談場所になっている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	ご家族等から相談があれば話をしているが、特別な機会は設けていない		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍のため会議は開催は出来なかったが、紙面での報告を各人に対して行い、意見等の交換を行った。	7月の運営推進会議は、家族や地域の方々、地域包括支援センター職員などが出席で再開し、地域のオレンジカフェの情報や意見交換を予定している。全家族に開催を通知し、議事録を玄関で公表している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議には担当者に参加していただいている。コロナ禍は会議の開催は出来なかったが、紙面で報告し、意見等をいただいた。コロナワクチンなども担当者と連携を密に取り行った。	町の社会福祉協議会から案内された介護に関する研修に参加している。身体拘束のアンケートに協力したり、クラスター収束後に担当職員が来訪するなど、関係機関と連携や協力体制を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	抑制防止委員会を設け、規定に従い勉強会等を行い理解を深めている。玄関の施錠については、解放しておくのが難しいため、やむを得ず行っている。なお、令和5年度より虐待防止委員会を併せて設立し、これと併せて研修・会議を行っている。	身体拘束適正化の指針を見直し、理念に基づいた抑制防止委員会を設立し、定期的に研修会を開催している。外国籍の職員にも適切に理解が進むように英語の表記も掲載している。言葉や薬による拘束を理解し、毎日荷物をまとめて帰ろうとされる入居者の思いを受け止めながら、車椅子で動き回る入居者に付き添っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	令和5年度より虐待防止委員会を設け、勉強会等を行い防止に努めている。上記参照されたし。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	勉強会を開き、理解に努めている。	成年後見制度や日常生活自立支援事業の活用はないが、パンフレットを玄関に整備し、動画で学習したり勉強会を開催している。 多様な家族関係の入居者が予測されることから、今後は契約時にも、制度などの説明を行う予定である。	
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時や改定など、その都度説明を行い理解を得ている		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見箱を設けるなど、ご家族の要望に応えるよう努めている	毎月発行の「あがの通信」で、各入居者の笑顔の写真や日々の暮らしぶり、行事、職員の異動などを報告しているが、クラスター発生時も家族の心配を受け止め、通信で対応を説明している。全家族から6回目のワクチン接種の同意書をいただき、家族から「ワクチンを打ったら、外出したい」と希望があったり、法事に参列される入居者もある。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	話をする機会はあり、反映している部分もある	コロナ禍で、ミーティングを中止し、朝の申し送り時に情報を共有していたが、今後は定期的に職員会議を開催予定である。入居者の上靴は、職員の提案で血行や動き易さから介護用の靴の購入となるなど、物品の購入や業務上の困りごとは相談できる環境を構築している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	個人の希望や状況に合わせての勤務体制や、人手が足りない時には皆で協力するなど、働きやすい環境づくりに努めている		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。 また、事業所で働く職員についても、その能力を発揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	採用に関しては、特に年齢や性別の制限はしていない。定年制度も設けていない	18歳から70代の男女の職員の殆どが口コミで入職し、外国籍の職員も就労している。日勤のみなどシフトの希望が叶い、昼休みを別室で取り、ネットで英語版の認知症基礎研修を探し、当該職員向けの研修を準備したり、多様なセラピストを目指している職員もあるなど、個々の能力を発揮して生き生きと勤務できるように配慮している。管理者は、職員が定着し夜勤専従者を雇用せずに、運営できていると話している。	
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	ミーティング時などに話をするよう取り組んでいる	4年余り前には理念を入居者本位に見直し、今回は虐待や抑制防止の指針を見直している。常に人権を意識し、人権を尊重するケアに取り組んでいる。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	コロナ禍のため出来ていない。今後、取り組んでいきたい		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取組みをしている	以前はグループホーム協議会を開催し、交流する機会を設けていたが、コロナ禍においては出来ていない。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	努めている。本人や家族から聞き取りを行っている		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	努めている。本人や家族から聞き取りを行っている		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	初期の段階では難しいが、本人や家族に寄り添いながら、必要としている支援を考えるよう努めている		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	築いている		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	必要に応じて協力を求めたり、届け物があった時に連絡を取るなど、家族との関係づくりに努めている		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	電話をかけたり、玄関先での面会など現状で出来る限りのことは行っている。	玄関での面会はアクリル板を撤去して時間の制限も緩和したり、所有している携帯電話で家族と連絡し合えるように支援している。家族との関係継続の支援だけではなく、馴染みの訪問理美容利用や「今年で最後です。」と地域の高齢者が七夕用のこよりを寄付されるなど、様々な関わりも支援している。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	話の合いそうな人と近くの席にしたり、スタッフを交えて会話をするなど孤立しないよう支援している		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院や退居で契約が終了した場合でも、ご家族から相談や訪問がある時には出来る範囲で対応している		
Ⅲ．その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の希望に合わせて、食事や入浴などを行っている	思いや意向の把握に努め、入居者が心地よく過ごせる支援に努めている。食事や洗濯物たたみなどに誘うとよく話をされるようになった入居者もあるなど、日々理念にある「本人のできる事、できる可能性がある事を考える支援」を実践している。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人や家族から聞き取りを行い、スタッフ間で共有している		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	本人と関わり合いながら見極め、気付きがあればスタッフ間で共有している		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイディアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアマネ、担当スタッフ等と相談しながら作成している	担当する職員が変化や気づきなどのモニタリング結果をケアマネージャーや管理者に報告し、介護計画の見直しに繋げている。クラスター収束後も食事以外は自室に籠りがちな入居者には居間の軒下の燕の巣立ちの見守りでメリハリある暮らしを支援したり、夕方になると家に帰ると車椅子から立ち上がろうとする動作の介助で、立ち上がりができるようになった入居者もある。	より現状に即した介護計画を作成するために、モニタリング結果に基づくタイムリーな計画の見直しを期待します。

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	気付きなど見逃さないよう、スタッフ間で共有しながら取り組んでいる		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々に生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	必要な方は上野病院のデイケアに通ったり、病状によっては訪問看護師のリハビリを受けている方も居られる。メンタルケアや、希望があれば買い物や散歩も一緒に行っている。レクや体操の運動も出来る範囲で行っている		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	近隣の小学校との交流や敬老会の参加など行っていたが、コロナ禍のため出来ていない。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人や家族が希望する医療機関への受診をおこなっている。コロナ禍で本人同行の受診ができない時は、代理受診も行っている	入居前のかかりつけ医の受診支援を基本としているが、入居者の半数以上は母体の医療機関を受診している。管理者が受診に同行し、情報提供や受診結果を家族に報告している。訪問看護による健康管理や訪問歯科受診も支援している。	
33		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週1回、訪問看護師による健康管理を行っている。その際に報告や相談をして適切な指示をいただいている。また急変時には電話にて連絡を行い、訪問や指示にて対応している		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	医療機関と連絡を取りながらお互いの情報交換を行い、入院中の様子や退院の時期などの話し合いを行い、関係を作っている		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	契約時から本人、家族にはお話ししている。時期を見極めて、その時期が来た時は、担当医や家族らと話し合いを行っている	入居時からホームでできる事を説明し本人や家族と話し合い、時間をかけても経口摂取ができなくなるまでホームでの暮らしを支援している。家族も母体の医療機関での看取りに安心感が大きく、現在入院されている入居者の家族は、院長からACP（アドバンス・ケア・プラン）の説明を受けている。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	概ね身に付けている。定期的ではないが、事あるごとに訪問看護の看護師などに教わりながら行っている		
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	地域との協力体制は今はまだ出来ていない。避難訓練は定期的に行っており、台風や停電時には非常食を準備したり、浴槽に水を溜めるなどの対策は行っている	クラスター発生時、母体医療機関から看護師の派遣や衛生材料の提供があり、使用方法やゾーニングなどの実施や指導を受けている。食料や衛生用品の備蓄を行い、持ち出し書面の内容を検討している。7月に町主催のBCP策定の講習会に参加する予定である。	
Ⅳ．その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	(17)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉遣いなどに気を付けて、出来る限り行っている	入居者の誇りを損ねない言葉かけや声の大きさに留意している。殆どの職員は入居者を名字で呼称しているが、名字の発音が難しく、女性の入居者を「お母さん」と声をかける外国籍の職員もある。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	誕生日に欲しい物を聞いたり、着替えの選択など出来る限り行っている		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	本人の好きなように自由に過ごしていただいている		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	自己にて着替えの出来る方は、着たい服を着られている。出来ない方は支援している。乱れている時はその都度整えるようにしている		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	食器洗いや食器拭きなど、出来る方には手伝っていただいている。食事形態もきざみ食やムース食、とろみを使用するなど個人に合わせて提供している	調査日の昼食は入居者の好きなカレーで、個々のペースでほぼ完食となっている。通信にはすし飯を作っている写真が掲載され、誕生日には好みのメニューが用意され、食器洗いやお盆拭きなど自分の仕事とされている入居者もある。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	摂取量や水分量はチェック表を作成し、管理を行っている。一人ひとりの状態を把握し支援している。食事が摂れない時は、栄養補助食品など状況に応じて対応している		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアを行い、仕上げを行っている。また週に1回、訪問歯科による口腔内のケアをしていただいている。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	トイレでの排泄を心掛けている。トイレに座ることが困難な方でも、2名で介助するなど本人の希望に沿うように支援している。排泄のタイミングや時間などの把握に努めている	大きな文字で「便所」と記載し、個々の入居者の排泄パターンに沿ったトイレでの排泄介助に努めている。布パンツやリハビリパンツは入居者毎の希望や見守りで対応し、夜間はポータブルトイレを使用する入居者もある。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分量に気を付け、便が出にくい場合には、マッサージやウォシュレット、薬などで対応している		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	入浴する順番など出来る限り希望を聞いている。入浴中の時間は、スタッフとゆっくり会話が出来たり、入浴剤で温泉気分を味わったりと楽しまれている。入浴を拒否される場合は無理強いせずに清拭を行うなどして対応している	ユニット毎に、週2回の入浴を支援している。同性介助の希望に応じたり、入浴を億劫がる入居者には時間を置いて声をかけるなどの工夫で、個々に応じた入浴を支援している。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	お昼寝の時間など必要に応じて休息をしていただいている。安眠できるよう居室の温度調節に気を付けながら支援している		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	概ね理解している。薬の変更があった場合などは、症状の変化を見逃さないよう注意して観察を行っている		
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家事が好きな方は洗濯や食器洗いなどを一緒にして下さり、食べる事が楽しみな方には、好みのお菓子を提供するなどしている。天気や気候の良い時は、園庭の散歩などで気分転換も行っている		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	戸外への外出はコロナ禍のため出来ていないが、スタッフと一緒に庭園を散歩したりするなど出来る限りで行っている。今後は、外出も予定している	コロナの感染状況に応じて、コスモスを見に行ったり、庭で桜の花見をしている。面会が緩和されていることから、家族と法事や外食などの外出を可能にしていきたいと管理者は話している。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	以前は買い物をする事が出来る方も居られたが、今は出来なくなっているため、お金は事務所で管理している。欲しい物や必要な物があれば、預かっているお金で代理で買い物に行き購入するようにしている。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の希望があれば電話をかけたり、手紙を書くなど支援している。年賀状などを一緒に作成し、家族に郵送している		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	食堂や玄関に季節に応じた飾りや写真などを掲示して、季節感を取り入れている。トイレは不快な臭いがしないように、誤飲などの危険が無いよう工夫して芳香剤などを使用している	事務室前の長椅子が配置された広い玄関は、家族との面会や入居者の憩いの場となっている。窓からの光が明るく射し込み、清掃が行き届き空調が管理された居間は、食後はテレビの前のソファや椅子に座って楽しみな燕の巣を眺めたり、テレビを見たり、お昼寝や友達とおしゃべりをする入居者の姿がある。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	居間や食堂は椅子、ソファを置いて、自由に過ごせるようにしている。テレビを観たり、会話を楽しんだり、居眠りされたりと毎日好きなように過ごしていただいている		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には本人の馴染みの家具を置いたり、裁縫や塗り絵をされたりと自由に過ごしていただいている	木製の名札がかかり、引き戸を開けると備え付けのベッドやテレビ台が配置され、大きなクローゼットに荷物が整理されている。出窓に孫や曾孫の写真が飾られ、若い頃に入居者が彫ったという木彫りの熊が飾られている居室もあり、居心地よい設えを支援している。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレの場所や居室などに貼り紙や目印になるものを飾り、場所がわかるよう工夫している		